

# (翻訳) 一世紀前の「新しい美術館」と「新しい図書館」

ジョン・コットン・デイナ、根源的民主主義者の仕事

Duncan, Carol. "A 'New Museum' and a 'New Library' a Century Ago: The Career of John Cotton Dana, Radical Democrat"

佐藤 真実子（立教大学教育研究コーディネーター）

中村 百合子（立教大学准教授）

本日午後の私の講演では、アメリカの公共図書館や美術館の改革者として当時有名だったジョン・コットン・デイナについてお話しします。1902年から1929年に亡くなるまで、彼はニューヨークからわずか数マイル西にあるまち、ニュージャージー州ニューアークの公共図書館の館長を務めていました。1913年にはニューアーク美術館の館長にもなりました。本講演では、ライブラリアンとしての彼のキャリアからはじめ、その後、彼の美術館の仕事に話を移します。しかし、最初に、デイナの青年期と彼が属した改革派の世代について少し触れておきたいと思います。

デイナは、アメリカ北東部のバーモント州で1856年に生まれました。デイナの家族は成功した商人や専門職で、政治と教会でリーダーシップを発揮してきた長い歴史がありました。若きデイナは弁護士になるはずでしたが、まだ学生のうちから法律業を毛嫌いするようになりました。26歳の時、学問を終えた彼は、法律事務所に入る代わりにコロラド州デンバーという西部のまちに向かう列車に乗りました（英文原文 fig. 1 参照）（遠方にロッキー山脈が見えます）。彼はその後数年間デンバーに住み、いくつもの風変わりな仕事をして働きました。その間ずっと、法律とは全く関係のないものを意欲的に読み漁っていました。古代ギリシア・ローマの詩人の作品から当時の現代小説まで幅広く読んでいたのです。次第にデイナは、近代の科学者や社会科学者の著作に引き込まれていきました。例えば、チャールズ・ダーウィンやハーバート・スペンサーといった、科学的、哲学的な探究を続けた18世紀ヨーロッパの啓蒙思想家たちです。このような、当時「新学問」と呼ばれていたものについて読めば読むほど、デイナは、家や学校で教えられた狭く偏ったプロテスタントの考えに対して批判的になっていきました。まもなく、彼は新聞や雑誌にエッセイや批評を発表しはじめ、近代的な考え、すなわち、きわめて世俗主義的で民主的な見解をもち、また、教育に特に関心のある人物として知られるようになりました。

デイナのキャリアは、アメリカ史において進歩主義時代として知られる時期、19世紀後半から20世紀初頭に展開しました。それは、巨大な企業が形成され、また、これらの企業が政府に影響を与えるようになった時代であり、多くの人の目には、アメリカの民主主義を揺るがすような深刻な危機が起きてきたと見える時代でした。国内の工業化しつつある都市で移民の存在が大きくなったことを、民主主義に対するもう一つの脅威だと考える人たちも現れました。あまりにも多くの移民が教育を受けておらず、責任ある市民の役割を担うには準備不足であったからです。デイナは、そうした状況に、斬新な考えや新しい形の制度をもって応えた進歩主義時代の多くの改革者のうちの一人でした。この時代の最もよく知られた改革者として、ジョン・デューイとジェーン・アダムスの二人を挙げることができます。デューイは今も重要なプラグマティズムの哲学者として研究されていますが、彼はまた、アメリカの学校改革を指導しました。ジェーン・アダムスは、シカゴのスラム街の中央に位置し、移民の子どもと親たちに实际的な支援と教育を提供した社会・文化施設、ハル・ハウスの創設者でした。デイナと同様、デューイやアダムスなどの改革者たちは、自分たちが急速な社会

的・経済的変化の時代を生きていることを理解していました。彼らの見方では、アメリカの民主主義への脅威は、アメリカ生まれの子どもにも外国生まれの子どもにも、また子どもだけでなく大人に対しても、教育を拡大し改革を行うことによってしか対応できないものでした。したがって、彼らは国家の中核的教育機関を再設計し、宗教から切り離すことに人生を費やしました。デューイは子どもの教育を引き受け、ジェーン・アダムスは近代的なソーシャル・ワークを生み出し、デイナはアメリカの公共図書館を再定義して美術館に対しても同じことを試みました。

デイナは、しばらくの間住んでいたデンバーで、1889年に図書館の仕事に就きました。デンバーは国内初の大陸横断鉄道の完成による恩恵を受け、小さなまちからほとんど一夜にして繁栄したかなり大きな都市へと変貌しました（英文原文 fig. 2 参照）。デンバー市庁が公共図書館を建てると決めたとき、進歩主義的な考えをもつ文筆家として既によく知られていたデイナが選ばれ、その指揮を託されました。デイナがつくった図書館は、彼が子ども時代に知っていた従来型の図書館とは可能な限り異なるものになりました。19世紀の図書館はまさに美術館の文芸版でした。美術館がオールド・マスターの絵画、ドローイング、彫刻を集めていたように、図書館は過去の古典文学作品を所蔵していました。図書館も美術館も、教育を受けた中・上流階級の成人に合わせて、啓蒙、内面的な向上、洗練された楽しみを提供していました。ライブラリアンはハイ・カルチャーの管理人とみなされていたのです。彼らは一般の人びとが何の本を読んでよいかを決め、下品で道徳的にいかがわしい作品が書架に置かれないようにすることを期待されていました。図書館を訪れる人たちは、書架の閲覧を許されていませんでした。端的に言えば、図書館は紳士淑女が愛用する、堅苦しく、格式張った、格調の高い場所として知られていたのです。

デイナは、まったく異なる類の図書館をつくり出しました。彼はそれを一人で行ったのではなく、当時、アメリカ合衆国とイギリスの両方で図書館を近代化する動きがあったのです。デイナは最も独創的な図書館改革者の一人であり、すぐにその中でも最も雄弁なリーダーとなりました。彼がデンバーでつくり出した図書館は、近代的で民主主義的な施設のモデルとして有名になりました（英文原文 fig. 3 参照）。その書架は一般の人びとに完全に開かれており、多くの保守的なライブラリアンが眉をひそめるような自由が読者に与えられました。ある特別の部屋では、子どもたちにも同じように自由な閲覧が許されていました。労働者たちが来館しやすいように、図書館は週7日、1日12時間開いており、非効率なお役所的手続きや規制は最小限に減らされました。ほとんどのライブラリアンが求めている威厳のあるエリート主義的な傾向を絶ち、市の新聞で図書館を広告することによって、デイナは新しい図書館利用者を惹きつけました。彼はまた、来館者を歓迎するような民主的な環境をつくり出すよう職員に明確な指示を出し、詳しく説明しました。職員は、役人風の態度をとったり、利用者に対して保護者ぶったり、彼らを正したりしてはならないとされました。彼らは（デイナの言葉によれば）次のように行動しなければなりませんでした。

「男の子も女の子も、男性も女性も、無学な人も博学の人も、礼儀正しい人も無作法な人も、同じように愛想良く、威張らず、出しゃばらずに接しなければならない… [彼らは特別に心を砕いて] 気後れしてまごついている利用者の不安を取り除いてあげなければならない」

デイナが民主主義的な図書館として思い描いたのは、ただ人びとを快適にするだけではなく、どんな年齢でもどんな教育を受けていようとも、すべての人の関心に配慮するものでした。デイナの図書館は、それまでの伝統的な図書館が遠ざけていたあらゆる類の本を提供したのです。それは、新聞、人気の小説や雑誌、技術マニュアル、そして「短命なもの

(ephemera)」— すぐに時代遅れになってしまうため定期的に入れ替える必要のある、人名要覧やその他の出版物といった資料を含んでいました（英文原文 fig. 4 参照）。デイナがよく言っていたように、公共図書館は一部の市民だけのものではなく、市民全員のものです。次のような写真は、デイナの指示で撮られたと推測してまず間違いはないでしょう（英文原文 fig. 5 参照）。この写真で私たちにもっとも近い読者（左側から 2 番目の男性）が、あからさまに貧しい身なりの労働者で、もしかすると白人ではないかもしれないのは、偶然のはずがありません。

幅広い市民を巻き込む努力が果たした役割は、単に個人の関心を満たすよりも大きなものでした。それは、社会的な価値をも生み出したのです。デイナが想像したようなやり方で多くの人が図書館を利用するようになれば— これはまた、人がそれぞれの可能性を発見しそれを広げることを意味します—、より多くの人が新しいものや新しい考えを創造し、発見し、発明するようになり、社会は彼らの芸術的、技術的、知的な活動からますます多くの恩恵を受けることになります。民主的な図書館はそれゆえ、進歩のエンジンであって、ほかの何よりも変化を促進する道具でした。デイナは、すべての進歩は変化であるとよく言っていました。自身の仕事を、いったん動き始めれば自然に起きると彼が思っているプロセスを促進することだと考えていました。その効果的な方法とは、まず第一に人びとに図書館に来てもらうことでした。はじめは人気の小説や雑誌を読むために図書館に来た人たちでさえ、一度中に入ってしまうと、やがてもっとまじめな作品にもたどり着くことでしょう。

デイナの進歩という概念の中心には、議論と反論の場があります。革新的な精神、すなわち、新しい考え方や行動の仕方を考案し、それにより社会を前進させるような精神は、反論することによって養われるのだと彼は信じていました。進歩は、確立された権威に対して何の疑問も持たない順応主義ではなく、むしろ権威に挑戦し思考を自由に働かせることから起きます。公共図書館— 彼はそれを人びとの大学と呼びましたが—、それはこのプロセスを最大限に推し進める場所です。実際の大学とは異なり、図書館には考えに点数をつけたり、それを訂正したりする教師はいません。大学にいるより、大勢の大人が自由に集まり、皆が関心のあるテーマについての意見を言い合う部屋にいる方がよいと、デイナは言いました。「教科書、大学の学位、一般に認められている基準などまったく気にせずに、それぞれの人が本気で自分自身の考えを示すのです」。私たちは権威におとなしく従ってしまうという危険に常にさらされていると、彼は警告していました。「ほかの国でもそうですが、この国ではすべての教育制度を統一しようという傾向が強くなっていて、それゆえ、学校生活の最初から最後の最後まで、子どもは一つの精神、一つの思考を持つ人びとに管理される運命にあるのです」。すべての教育がそのように統一されたとき、国民の思考は均質化し、新しい考えは試されることすらなく押し潰されてしまいます。真の教育とは、権威の影響の及ばないところでのみ起こります。「私たちが教師というものを完全に排除するまで、この国においても、またほかのどの国においても、真の教育に至ることは決してない」と彼は言っています。

デイナの図書館は、検閲から完全に自由でなければなりません。老いも若きも教育を受けた人も受けていない人も皆が、いついかなる時にも、公共空間で流通している思想や情報、文化形式の全範囲に無制限のアクセスができなければなりません。ひとつの暫定的な真実からその次の真実へとプラグマティックに移行しながら、たえず自らをつくり出し刷新していく社会は、検閲から自由な開かれた環境を必要とします。つまり、思想の自由、言論の自由、異なる意見を抱く自由が法律によって保障され、制度的な慣例によって保護されている環境が必要なのです。デイナの見解では、これはまさに図書館が最も得意とすることです。「図書館は、コミュニティにおける精神の刺激であるべきです。それは、古いものを新



鮮に、異質なものを許容可能なものに、新しいものを問い直し可能なものに、すべてのものをすばらしいものにするのを助けるべきなのです」と彼は宣言しました。

デイナは、こうした信念を実践することに熱意を燃やして、デンバーのはじめての公共図書館のライブラリアンという新しい仕事を引き受けました。彼が最初に行なったことの一つは、新しく、なるべくなら論争の的になるような考えをコミュニティに対して求める呼びかけでした。私たちの時代は急激な変化の時代、「古い考え、何世紀もの間批判の余地がないとみなされてきたものが自由に挑戦される」時代だと彼は書いています。世界をよりよいものにする方法について新しいアイデアをもっている人はだれでも、自分が推進したいと思う主義主張が何であれ、それを提唱している本やパンフレット、そのほかのあらゆる資料をデンバー公共図書館に持ってくるよう求められました。デイナの考えでは、考えがラディカルであればあるほどよいのです。これは、1893年に撮られた写真で、彼が最も急進的かつ熱烈に民主主義を信奉し、アメリカの公共図書館が世界を変える原動力であるともっとも強く確信していたときのものです（英文原文 fig. 6 参照）。そしてここにこそ、単に本のコレクションのみならず、社会と文化の変化の複雑で弁証法的な過程をも監督するという、新しい種類のライブラリアンとしてのデイナの姿があるのです。

彼は、市をよりよく変えようとしている人びとのグループを支援するために、考えうるすべてのことをしました。人びとの興味に関係する本やそのほかの資料を買い、彼らが活動の計画を立てることのできる会議室を提供しました。コロラドは、19世紀に女性に対して投票したり公職を持つ権利を与えた五つの西部の州の一つでした（英文原文 fig. 7 参照）。女性は、デンバーで、特に公的な学校制度において最も活動的で、組織化され、影響力のあった改革派でした。実際、デンバーにはじめての公共図書館の存在をもたらしたのは、女性たちの運動のおかげでした。ですから、デンバー公共図書館では、女性が最もよいサービスを受けていたのです。

\*\*\*\*\*

ニューヨーク市からわずか数マイル西のニューアークは、化学製品や機械から、帽子、ビール、ケーキにいたるまで、あらゆるものを製造していました（英文原文 fig. 8 参照）。1910年までに人口は35万人に達しました。1910年までの40年間で人口は3倍以上増え、同じペースで伸び続けようとしていました。人口増加のほとんどは、その市で拡大していた産業によってヨーロッパの隅々から勧誘されてきた移民が大量に押し寄せてきていたことが原因です。ニューアークは、労働者階級のドイツ人、アイルランド人、ユダヤ人、ギリシア人、イタリア人、中国人、そしてアフリカン・アメリカンの住民のパッチワーク・キルトのようでした。全体で3人に2人が外国生まれ、もしくは外国生まれの人の子どもでした。

ニューアークの開発は、その製造業や商業界のリーダーたちがしっかりとコントロールしていました。彼らは、ニューアークを近代的で羽振りのよい市、投資家に利益をもたらすような場所にしようと固く決めていました。道路を舗装し、下水道、学校、公園、路面電車の路線をつくり、そして公共の建物やモニュメントでまちを飾りました。1900年に、大きな費用をかけた新しい図書館の建物が完成しました（英文原文 fig. 9 参照）。図書館の建築家たちは、15世紀のイタリア・ルネサンス期の宮殿に倣って建物を設計しました。ヨーロッパでも合衆国でも、ルネサンス期の建築は文明化の達成の頂点を表していて、すぐれた建築家たちは自由にその特徴を取り入れたのです。そのような建物は、品位や威厳を市にもたらし、当然のことながら、市を支配するエリート層の社会的な地位を高めました。右側にある

のが、フィレンツェのストロツツィ宮殿のドローイングで（英文原文 fig. 10 参照）、イタリア・ルネサンス期の建築の有名な一例ですが、これがニューアークの図書館のデザインの源泉の一つと推測されます（英文原文 fig. 9 参照）。図書館の中庭はそれ以上に綿密にイタリアの様式に沿っています（英文原文 figs. 11, 12 参照）。（デイナの意見としては、そのように大きな費用をかけた建築はお金の無駄遣いで、本のためにもっと上手にお金を使うべきでしたが、彼はこれを公的には発言しませんでした、少なくともはじめのうちは。）これは後の写真で、今日の建物の姿です（英文原文 fig. 13 参照）。

デイナは図書館を、学習と娯楽と進歩のための大きな中心地にしようといつものように決意して、新しい職に就きました。しかし、ニューアークでは、彼がそれまでに直面したよりもずっと大きな難題と障害に直面しました。子どもたちが真剣に本を読むようになることは、いつでも彼の主な目標の一つでした。ニューアークには移民の子どもたちが何千といまましたが、青年期を過ぎて学校に行く子はほとんどいませんでした。家族は彼らに働きに行ってもらふ必要があり、彼らを待っている商店や工場の仕事では、知的好奇心や独立心を持っていても何の役にも立たないことがほとんどだったのです。市を動かし、公共図書館の予算をコントロールしていたビジネスマンたちにとって、従順で技術的にみて有能な労働力を確保することの方が大切だったのです。彼らがデイナの民主主義的な方針を支持しないとなると、デイナは彼らと衝突することもありました。しかし、デイナは、自身の民主的な価値観、つまりすべての個人が自分の可能性を十分に実現する権利をもつという信念と、貧困と階級のために労働者が押しつけられていた制約との矛盾に、ほんとうに向き合うことはありませんでした。民主主義的な価値への彼の愛情は本心からのものでしたが、彼は心の底ではブルジョア的なリベラルでした。彼は、ビジネスマンたちは社会を現実に関心し促す主体であり、その人たちの進取的な商業や製造業の知識が多くの人たちに対して最大の物質的な進歩をもたらすと考えていたのです。

それでもやはり、デイナは民主主義的な理想とニューアークの階級制度の現実との間のバランスを見つけようと懸命に努力しました。彼は、ビジネスに関する革新的な新しい分館をつくり、同時に、移民の居住地域の中心に公共図書館の分館を複数置いて、彼らが読むことのできる言語で書かれた本を配架しました。図書館の職員は、外国人の労働者とその子どもがくつろげるよう気を配りました。それは移民人口の多いアメリカの市でいつも起きるわけではないことでしたが、分館に行くことのできない子どもたちに対しては、移動図書館をつくり、彼らのところに送り出していました（英文原文 fig. 14 参照）。

\*\*\*\*\*

ここで、博物館の館長としてのデイナのキャリアに移ります。彼の視覚文化への関心はニューアークに移るずっと前から始まっていました。デンバーにいたときから、デイナは、人は美的な感覚を持って生まれてくるのではなく、それを文化や周囲の環境から習得していくという考えを持っていました。市民の視覚リテラシーを高めたいと望んで、彼はデンバーの図書館に版画や美術品を飾り、書架には芸術、建築、デザインの本を十分に揃えておくようにしていました。デンバーで、後にはニューアークで、デイナは、芸術的、科学的、技術的に興味深い何千枚もの版画や写真で構成されるデータベースをつくりました。そのすべてが目録化され、簡単にアクセスできるようになりました（英文原文 fig. 15 参照）。

美は日常の生活の一部になりうるという信念は 20 世紀の初期に、大西洋の両側で広まっていた。もっとも、教育を受けた人たちの間で広がっていたということです。批評家は

しばしば日本を視覚文化のモデルだと指摘していました。19世紀に人気の出た日本の版画は、質素な家庭も高いお金を支払わなくても視覚の楽しみに触れることができるものとして熱烈に賞賛されていました。デンバーでは、デイナは図書館の閲覧室の壁に日本の版画をかけていました。後にニューアークで、彼は浮世絵の大きなコレクションをつくりました。彼はそれらを使って、美的価値が美術館や展示室に限られる必要はないことを証明したのです。美とは、絵や彫刻にだけでなく、あらゆるものに見つけることができるとデイナは主張していました。彼は日曜日の新聞や広告掲示板に載るひとコマ漫画や風刺漫画に美的な価値を早くから見出していた一人でした。デイナは、1906年に学校の先生たちのグループに次のように言っていました。

「家、よくある平凡な家、机、椅子、ピッチャー、カップ…日曜新聞の絵、広告掲示板、こうしたものはあなたが毎日、毎時間目にするものです。そんな場所がどこかにあるとすれば、このような場所こそ、子どもたちにしっかりと見て好きか嫌いか考えてもらんと教えるべきところなのです」

キャリア全体を通して、デイナはハイ・カルチャーの価値を下落させ、大衆文化や大量生産品の美的価値を信奉することを非常に好んでいました。

それゆえ、1909年にニューアークの裕福なビジネスマンたちがニューアーク美術館の創設を発表した際に、デイナは並々ならぬ関心を持ったのです。その新しい施設の後援者たち——美術館の理事たち——は、遠からず美術館を建設できる日がくるだろうが、当面、美術館は図書館の上の二つの階を使って運営することになるだろうと考えていました。実際、図書館の上の階は展示室として使えるように設計されていました（英文原文 fig. 13 参照）。この写真では見づらいのですが、屋根の下に大きな空間があって、よい展示スペースとなっていました（英文原文 fig. 16 参照）。デイナは、2、3年間非公式に博物館を運営し、その後、1913年に公式の館長になりました——お給料は上がりませんでした。そのときまでには、図書館改革の業績によって、彼は全国的な評価を得ていました。デイナは、今度は美術館の改革者になることに狙いを定めました。図書館で行なった改革を美術館の運営にいかに移すことができるかを考えはじめました。デイナはすぐに、新しい美術館のアイデアと彼が呼んだものを容れ込むための新しい建物をつくる運動をはじめました。彼が最も説得する必要がある人たちは、美術館の裕福な理事たちでした（英文原文 fig. 17 参照）。市政府は図書館の支出に対して資金を拠出していましたが、新しい建物は民間の寄付に依存していました。

デイナの新しい美術館のアイデアは、ニューアーク美術館の設立許可書を策定していたときに理事たちが思い描いたものとはまったく違っていました。彼らの目標は、ニューヨーク市のメトロポリタン美術館やボストン美術館にできる限り類似した従来型の美術館をつくることでした。当時、合衆国は、美術館建築の波が押し寄せている最中でした。その時期はしばしば、「金ぴか時代（Gilded Age）」と呼ばれます。19世紀の末から1914年の第一次世界大戦まで続いた金ぴか時代は、産業が急成長し、莫大な富が蓄積され、豪華な大邸宅が建築されて家具が備えつけられ、巨大な市立美術館がつくられた時代です。メトロポリタン美術館（英文原文 fig. 18 参照）やボストン美術館（英文原文 fig. 19 参照）は、ほとんどすべてのアメリカの市で上流階級の羨望的でした。自分たちが美術館をつくるにあたって、ニューヨークとボストンの美の殿堂は、あらゆる手を尽くしてパリのルーヴル美術館やロンドンのナショナル・ギャラリーのようなヨーロッパの国立美術館を模倣したのです。したがって、ニューアークのような小さな市は、すでに模倣だったものを模倣しようとしていたのです。それでもなお、たとえ小さな美術のパブリック・コレクションだとしても、それは市の繁栄の宣伝になり、支配階級にとって自分たちを実物以上によく見せる額縁になることができました——美術館の理事会の



委員であることは、市の上流階級における自分の地位を証立てるものだったのです。もちろん、美術館が豪華であればあるほど、寄贈者に反射する栄光も強くなったのです。

ここで、この時代のアメリカの美術館建設を動かしていたもう一つの要因に言及しておく必要があります。ニューアークを含む多くのアメリカの市で移民の存在が圧倒的に大きくなったことで、何世代も前に新世界に定住した北ヨーロッパ系の人びと、いわゆる「オールド・ストック」のアメリカ人たちが警戒感を募らせることがあったのです。彼らの多くは、新しく来た移民に文化的、政治的に失墜させられることを恐れていました。美術館や交響楽団、そしてそのほかの文化施設は、アメリカの公式のハイ・カルチャーとして北ヨーロッパの芸術の伝統をはっきりと示していました。美術館の職員は、自分たちの施設は一つのハイ・カルチャーを提供することで、市の多様な階級や民族集団を一つのコミュニティに団結させているのだとよく主張していました。しかし、ほとんどの地域でも、美術館を訪れる人の大部分は、教育を受けた中・上流階級の白人プロテスタントでした。美術館は結局、アメリカの支配階級が掌握するハイ・カルチャーの権威を強化していたのです。

必ずといっていいほど、新しい市立美術館は、古典時代—西洋文明の頂点とみなされる時期—を彷彿とさせるものを一つや二つ引用していました。ボストン美術館はファサードの中央にギリシアの神殿を配し、一方のニューヨークのメトロポリタン美術館は古代ローマの浴場を模倣しています。そのほかの市はイタリア・ルネサンスの宮殿の様式を踏襲することにしていました。美術館の建築が豪華で印象的であればあるほど、アメリカの億万長者はますます熱心にその寄贈者リストに名を連ねようとしていました。億万長者の大軍はヨーロッパに押し寄せ、貴重な美術品を船いっぱい買い漁りました。その結果、ボストン、ニューヨーク、シカゴなどの都市の美術館は、(推定では)オールド・マスターの絵画、めずらしいタペストリー、アンティークの家具、そのほかの古くて高価なものを大量に蓄え増やしていきました。成金の投資家、鉄道王、鉄鋼王たちは、かつて王、君主、教会の枢機卿らが所有していたものを特に探し求めました。このようにして、美術のパブリック・コレクションは、銀行業や産業界のエリートが王侯貴族の昔日の栄光を借りて自らを表現できる舞台装置となったのです。

デイナは、「死せる神々の神殿」や「絶滅した貴族の宮殿の模倣」に見せかけて建てられたアメリカの美術館のばかばかしさを嬉々として指摘していました。アメリカの美術館は薄暗く、展示はほとんどの人が退屈に感じ、誰をもうんざりさせるもので、有用だと感じる人はごくわずかだと文句を言っていました。せいぜい、それらは「金持ちによる衒示的浪費」であり、「公的資金の無駄遣い」の証拠であると。「衒示的浪費」というのは、アメリカの政治経済学者ソースタイン・ヴェブレンの著作に由来します。彼の著書『有閑階級の理論』は広く読まれており、デイナはその最も熱心な崇拝者の一人でした。その中でヴェブレンは、金ぴか時代の大金持ちを—教養があり洗練されているという彼らのセルフイメージとは正反対に—未開の野蛮人になぞらえています。高価なぜいたく品、大邸宅、驚くべき美術コレクションへの彼らの飽くなき欲求は、衒示的に浪費される財産の変種にすぎません。このような浪費の要点は、ありありと階級を見せつけて、社会的に下層の人たちから上流階級を区別することだとヴェブレンは断言していました。とはいえ、働いていない富裕層は、下層階級の生産的な創造性や労働に寄生して生きているのです。デイナはヴェブレンの考えを好ましく思っていて、それを美術コレクションに応用することがよくありました。ニューヨーク、ボストン、そのほかの都市の美術館は、階級意識を精巧に練り上げたものにすぎない、と彼は書いています。彼は、ただ古いからとかめずらしいからというだけで美術品を無批判に褒め称えたり、法外な市場価値を付与したりすることを手厳しく批判していました。特に、アメリカの億万長者が過去の傑作と信じて(しばしば間違えて)購入した、色あせた油絵に批判の矛先を向けました。

デイナには、ニューアーク美術館の理事たちだけにすべてを任せてしまえば、ニューヨークやボストンの例に倣うだろうことはわかりきっていました。美術館の創設の直後、彼は、従来とは異なる美術館の可能性、過去ではなく未来に目を向けた美術館について書いたり、スピーチをしたりしはじめました。ギリシアの神殿やルネサンス期の宮殿を模倣するのではなく、彼は高く聳え立つ美術館の建物、近代的な工場やオフィスの建物に見えるような、機能的な鉄骨構造の建築を提案しました。従来の展示室が薄暗く、霊廟のような静けさであったのと代わって、デイナが構想する美術館は、たくさんの大人が学び、知的活動に従事し、美的な刺激を受ける場所です。そして、騒々しく活発な子どもが大勢熱心にもものに触って遊んだり、きちんと養成されて、十分な給料をもらっている職員に質問をしたりする場所です。これは 1916 年のテキスタイルの展覧会の写真ですが、この写真からわかるように、子どもたちは展示されたものを実際に使ってみたり触ったりすることができました（英文原文 fig. 20 参照）。「美術館がものを手に入れることは簡単ですが、頭脳を手に入れることは難しいのです」と彼は書いています。過去や現在の支配階級のエリートが所有していたものを安置する祭壇にするのではなく、デイナの実験室は、よい図書館や進歩的な学校のように、美術館の外にある現代生活について考えるよう刺激を与える場所でした。そこには貸し出し部門があり、人びとは収蔵品を家に持ち帰って、ゆっくりと研究できるよう構想されました。先生たちは授業のためにおもしろいものを借り出すことができ、職員は小さな巡回展示を、百貨店や郵便局など、人が大勢押し寄せるところで行なうことができます。そして、もちろん、最新の教育部門が置かれ、職員たちはジョン・デューイの著作に導かれて、記憶するのではなく実際にやってみることで子どもたちは最もよく学ぶのだということを理解していました。

デイナはいつも、日常生活における美的価値の重要性を強調していました。ほかの知識人たちと同様に彼も、近代の産業都市が醜く荒廃していることや、機械製の日用品がぞっとするデザインであることを批判していました。しかし、ほかの人たちが手工業経済に戻ろうと説いていたのに対して、デイナは、機械の時代を自分たちがとどまるべきところとして受け入れていました。機械についての専門用語とともに、機械の美的な強みは何でありうるかを学ぶという課題にデザイナーたちが果敢に取り組むなら、機械製品も美しくなりうると主張していました。ニューアーク美術館は美術作品や工芸の展覧会を開催しましたが、可能なときはいつでも、本や印刷物を含む、美しくデザインされた機械製品を絵画や彫刻よりも重視し、特集したのです。彼のねらいの一つは、美的な質の民主化をもたらすであろう消費主義の文化を醸成することでした。彼が企画した最初の野心的な展覧会は 1912 年に開催されたもので、美しいデザインに熱心に取り組んでいたドイツの製造業者のグループの製品を展示しました（英文原文 fig. 21 参照）。「ヴェルクブント展（ドイツ工作連盟展）」は、新しい美の形を追及しているように見える機械製品を展示し、そこにはテキスタイル、食器、高価ではない版画、陶器のような日用品がたくさんありました。また、これらの広告ポスターのような近代的なグラフィックデザインもありました（英文原文 figs. 22, 23 参照）。デイナは漫画や広告ポスターのようなものも好んで展示しましたが、それは従来の美術館では考えられないことでした。彼が成功させた展示の一つに、「高価でないもの」というものがあります。そこにあるものはすべて美術館の職員が選んだもので、彼らは地元の百貨店に行って、10 ～ 50 セント程度のよいデザインの機械製品を買うように指示されたのでした（英文原文 fig. 24 参照）。彼らが購入したのは、「美しさは値段や希少性、古さとは関係がありません」と大々的に書かれた大きな表示の下に置かれました。（日本の版画が下部の右端にあることにご注目ください。）次の写真は、そのほかの例です（英文原文 fig. 25 参照）。重要な点は、美しさはたとえ貧しい家庭でも、彼らがそれを認めることを学ぶのなら、手の届くところに



あるということでした。

デイナの美術館では、美しさは安価なものや機械製品だけでなく、白人ではない人たちによって生み出されたものにも見出すことのできるものでした。デイナの美術館は、ほかの美術館が「民族誌学上の器物」と考えていたものを芸術品として収集して展示していましたが、それはヨーロッパの「美術作品」よりも美的価値が低いと思われていたカテゴリーでした（英文原文 fig. 26 参照）。たとえば、これらのアフリカのラグは真剣に美的な関心を寄せる価値があるものとして扱われ、それぞれが額に入れられて別々に仕切られたスペースに置かれていました。この展示は 1930 年からはじまりますが、その何年も前に、デイナの美術館は白い壁を背景にした近代的な展示スタイルをつくりあげていました。デイナ自身、1912 年に美術館のシンプルなガラスケースをデザインしていたのです。

ニューアーク美術館が図書館の建物に置かれていた何年もの間、デイナのエネルギーはほとんどが企画展に注がれていました。最も野心的であったのは、新しい美術館に対する彼のアイデアを示して、あわよくば裕福な人たちを説得して新しい美術館を建てる資金を出させようとした企画展です。最終的に、何年も運動を続けた後の 1926 年、一人の理事がお金を工面しました。図書館から少し歩いたところにあるこの建物は、無駄のない形と単純化された大きな塊がうまく融合する一方で、古典的なアーケード（アーチ型建造物）やエンタブラチュア（柱列によって支えられる水平な部分）を調和させています。それは、デイナがかつて提案したような工場の構造からは似ても似つかないものですが、十分に近代的でした（英文原文 fig. 27 参照）。

新しい美術館のための展示を計画しているとき、デイナは美術館のしきたりにほんの少しだけ敬意を払い、入り口近くに一つか二つの部屋を用意して、理事たちの間で好まれた油絵の類をかけておきました。彼のもともとの考えは、機械やその部品、印象的な漫画や広告ポスターなどを含む、美しくデザインされた実用品で美術館全体を埋めるということでした。たとえば、1912 年に彼が企画した、「ヴェルクブント展」のポスターのようなものです（英文原文 fig. 22 参照）。このときまでには、美術館は絵を展示し、収集するべきであることをデイナも受け入れてはいましたが、それは存命のアメリカ人芸術家、望ましくはその市か近隣に住んでいる芸術家の絵画、版画、ドローイングであるべきだと主張していました。これは、裕福なアメリカ人がまだヨーロッパのオールド・マスターの作品をむやみにほしがって、流行を追う批評家たちが「田舎くさい」とか「地方独特だ」とみなす作品を見下していた時代のことです。デイナは、もし美術館が一般の人たちの生活に美術をもたらしたいとほんとうに思うならば、美術館がそのコミュニティに住む芸術家のために安定した市場を開拓し、芸術家たちが自分たちの作品で生計を立て、一般の人でも手の届くものをつくることができるようにしなければならないと主張していました。デイナは自分がモダン・アートを見る目がないとわかっていたので、キュレーションの仕事を誰か判断力のある人に任せていました。そのおかげで、ニューアーク美術館は 20 世紀初頭のアメリカ美術のすばらしいコレクションを集めることができたのです。

デイナと彼の美術館についての調査をはじめたとき、私は彼がどのようにして、当時の標準的な美術館の慣例をこれほどまでに取り払うことができたのだろう、どうやったらこれほどまで伝統への敬意を払わずにうまくやってのけられるのだろうと不思議に思っていました。やがて私は、ニューアークが二番手の市だったことが主な理由だという結論に行き着きました。ニューアークはつまらないところだったのです。産業から富を得て、時代の最先端を行く美術収集家としての地位を求めている人たちは、ニューアーク美術館のやり方が好きでないのなら、どこかほかの場所へ行ってお金を使えばよかったのです。